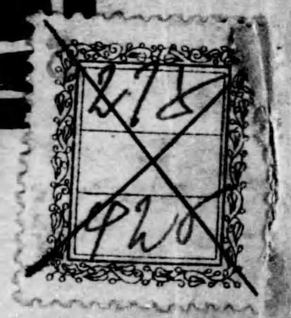
特 100
403

於如乃麿
著水伯測法



始

特100
403.

大正
4. 10. 8
内交

內容

題字……西森眞太郎先生
序文……文學士 下司金先生
表紙繪……中田冥外氏
▲白日を吸ふ草……1
▲光と影と……33
日の降る方へ……59
淋しさに泣く日……81

五大
八〇八
文門

青年時代は如何なすべきかと云ふ疑問が人生の問題かと存じ候。この私信は日頃恩愛深き師の君の小生に示されし御教訓にして日夜服用する所のもの、亦以て巻頭の序となし申し候。

御手紙とそれから歌日記それは一日遅れて今日頂戴致しました昔日の情誼未だ御忘れなく時々御訪ね下されるのが身にしみてうれしう御坐いますこまぐとした御述懐切に御同情申し上げますしかし我ありての學問で學問ありての我れではありません我が何よりも大切ですその我れ

も小さな我れでは駄目です大なる我でなければなりません大なる我れは必しも都會でなければ研かれない譯のものではありません却つて山高く水清き田園の方が都合のいゝ場合があります君は人格と云ふことをこの頃思ふやうになつたとの御話でしたねその人格です昔王陽明は罪を得て地方に流されまして讀むべき書物も手に入りません且は失望したでしやうがだんだん古い話を聞いたり考へたりして居る中に靈の修養は外に求むべきものでない内に求めなければならぬと悟つて遂にあの一派を開いたと申すことです内に求めるのに都會と地方と何を撰びませう都會の目まぐるしさに驚いて走り且つ倒れるのも意氣地が無いのですが地方に居て向上の一路を見出し得ないといふのもまた余り情ない話です君は又秋は深省を以て人に迫ると仰言(をつしやい)ました

ねその深省です内に求めるといふのはよい所に
お氣がつかれましたどうか内に求めて下さいあ
せらずたゆますゆつたりとしかもしんねり強く
内に内に求めて下さい決して外に求めてはなり
ません外には色々のまやかしいものが手を擴げ
て待つて居ます色々の新らしい書物色々の珍ら
しい思想があちらからもこちらからもあなたを
引張凧にします右に引こじられ左に引こゞられ

遂にはへと〳〵に疲れなければなりませんしか
もろくなものはつかませられません早い話がそ
れ等の新説新思想の多くは歌亞の大動亂で根底
から裏切られ顚覆せられたのではありませんか
眼前の事實が何よりの眞理です之は歌の上にも
云ひ得られます君は歌がお得意でしたねそれも
です外に求めては駄目です所謂新らしい歌――
何々派何々調紛々として數ふるに堪えませんこ

れを追ひ彼に走る中にはいつの間にか我をなくしてしまう恐があります我をなくして我の歌が何處にありましやうそこには人の歌、歌の死骸があるばかりです死骸にはよく鴉がたかります新しい新らしいといつて新らしい歌にわいわい騒いで居るところは鴉が死骸をとりまゐてガーガー鳴いて居るのとよく似て居る場合を私は度々發見します舊が何です新が何です我にはたゞ眞

があれば足れりです此れが何です彼が何です我れにはたゞ我があれば足れりですその我その眞は決して外に求めて得らるべきものではありませんたゞ内に求むべきです内に求めて下さい内に求めて下さい内に内に求めて下さい秋は深省を以て人に迫るそこにお氣のつかれたのは確に君の一進境を示すものです今更大事の靈――眞我を托すべき聖なる殿堂――内體の危嶮を犯し

てまであの塵深い都門にあこがれねばならぬことが何でありましやう愚な事ですドつと田園に落着いてあせらすたゆますゆつたりとしかもしんねりづよく靈の修養に勉めて下さいそして君の好む道――それは人の開いた道でなく君自らの鍬で開いた道その道を開き開き奥深く辿つて下さい生命の泉はこれを措いて他に達する道はありません歌日記――垢ぬけのした可愛らしい、

いゝ雑誌ですこと高知の印刷もなか〳〵進歩しましたね記事もどの歌も面白く拜見しましたその歌に就いて私のいひたい事が何であるかそれはこれでお分りでせう私がこの九州の一隅都の城に燻つて居る心特もまたこれで御分りでしやう

下らぬ長談議をしました許して下さい氣候の變り目御大事になさい

九月十八日夜

溝淵繁君　坐下

金

白日を吸ふ草

こゝろよくわれにまつはる海の香の泌みりて歩む海の靜けさ。

土佐の國女と云へは色黑く厚化粧する働きもする。

暖たかき床に臥す身は胸に手を置きて物なゞ思ふ春の夜。

インクもて書きし消息ゞン尖の紙にかゝりて泌みし悲しさ。

年頃の憂か君はうなだれて云ひ得ぬものか
ひとりもだへつ。

わりもなく夢より醒めし更くる夜のしづか
にわれに泌み來るかな。

あてもなく歩みきたりて草に坐し小さき聲
にて呼びし君が名。

手拭は濕れるまゝに朝明けの光りを受けて
動く冷たさ。

春の夜の靜けきことのなつかしさ晝のぞよ
みの何地へ去りし。

母はゆきとり殘されてなほ生くるわが若き
日のいとゞ淋しき。

砂山に波の音きゝて友とぬる横たへし身の
ほの暖たかさ。

わが若き心抱きてしみ〳〵と別れを偲ぶ暖
たかき床。

棧橋に君と別れて歸りくる電車の窓にひと
りさびしき。

若き日の誇りにすぎて春の日をあらぬこと
なぞ思ふてありぬ。

川端を急ぎ歸りぬ春の月われとつれだち歸
りこしかな。

大空の青きが中に今月も又心ひたして君を
おもへり。

春はゆく思ひぞへだて絶へぬらし如月のも
と物思ふ子に。

いづくをは君行きますと振り歸る二人の瞳
合ひてまたゆく。

相思ふ心にそれと思へども あまりによはく
すぎゆきしかな。

水の如靜けき夜かなさびしさが絶えず二人
にまとふてあるらむ。

顔よ顔その表情のわりなけれ涙なき顔あざ
笑ふかほ。

亡き友と生あるわれと思ひみるこのかなし
さのせん方ぞなし。

あゝ小女その黒髪よ年長けて數多の人のひ
とみ引くらし。

君思ひ敢果なく暮れて雨の夜をひとしほさ
びし消息を書く。

憂き事を酒に忘れてすごすてふ君となりに
きうら淋しけれ。

月の夜や潮鳴りきけは痛ましき心抱くも亡
き人のため。

幼き日妹はゆきぬ兄としてわれを呼ぶ日の
なくて逝きけり。

同ド性に相呼ぶときのなしときく花咲く春
もかくてもの憂し。

菜の花の黄いろき中に只一人君の名呼べは
春は淋しや。

薄闇の中にほんのり菜の花の黄なる邊りに
月を仰ぎぬ。

うす闇にほのかに匂ふ緑り葉と戰げる風に
春も立つらん。

足のはせ足をかゞめてかのひと夜布團に春
はいと悲しかり。

春草のうすら匂ひに身を投げて晴れし晩秋
の空を仰ぎぬ。

返しにと君が送りしさ夫藍の花また咲けど
君なくさびし。

夏は來よ春はとく去れ古帽子出せは夏はう
すら匂へり。

眞黑きさくらんぼうを唇に小女は今日も歌
をうたへり。

こゝろよき夕べとなれは灯ともれば冷たき
風に春は宿れり。

浮草が小溝の中に花をもつかわたれ時の赤
きらくじつ。

花籠に花もたらせし小女來て花召しませと
顔赤らめぬ。

暗き方へ暗き方へとたよりなき明日を思へ
は二人さびしむ。

わが願ひ君が操の清かれと白合の花咲くゆ
うべなりしか。

わがそばにむらがりてこしこの春のぬくみ
が物を思はせるかな。

そゝちるゝ空虚の胸にひそまりて母と妹の
名が悲しかなし。

なにごともたゆみ勝なる我が母は何思ふら
む三月は憂し。

弱き子は二人の夢を相抱き憂き十八も夢と
過ぎきぬ。
潮風を受けて同じきその窓に育ちし人の碑
のなつかしや。
刻まれしその姓名に涙するふれし刹那の強
き悲しみ。
今日もまた濕れる窓に只一人空仰ぎつゝ君
思ひしが。

別れ來てものゝすべてを思ふときわりなき
涙頰を流るゝ。
たゞ一聲杜の梢に消へ去りし不如歸汝れは
われを泣かせる。
今日もまた涙かみしめ春草の匂ひの中にま
ろび臥しにき。
物思ひ日毎に歩ゆむ川岸のダリヤの花が水
に映れり。

貰ひ來しダリヤが紅き花をもつ頃は來たれ
り君いかならむ。

なつかしき少女は胸に手を置きて靜かにい
ねん戀ふると知らねば。

かの町のいとしき人にかく云へば泣き給ふ
らむ合はでかへりぬ。

鳥が啼く杜の靜けさ二人して歩むはとりに
咲きそろふ花。

大根は殘されしまゝに赤土のほのかに匂ふ
畑に月しぬ。

震はせて胸毛ふるえて小鳥啼く郊外を歩ゆ
む音の靜けさ。

朝なぎをいそぎんちやくが潮を吐く海そひ
道に月見草さく。

潮光る午後さがりかな君思ふ心にみゆる濱
のなでしこ。

君がためいつわられたるこの恨み砂にまろびぬ大空のもと。

やゝなれし心にみゆる砂濱に絶えずさびしく君みるこゝろ。

草坐(シ)けば鳥がうたへば嘆かるゝ土の香淡く悔涙しぬ。

くるり、くるり、いづくへ行くか落日に向へば今日も涙落ちにき。

松原の小砂にゐねてさめ〴〵と泣かまほしけれ淋しき心。

天地にバイロン、バイネの熱なくも六寸の筆すつとも思はず。

春の月にうすら匂へる葉櫻の奥の御堂に鐘の音ぞする。

蓮華なぞ刈られし畑に鎌一つうす光り居りひきがへる啼く。

われ呼べばはた呼び返すなつかしさエコー
の如く君よあれかし。

桐の葉の面をすべる雫みて悲しと思ふわれ
となりにき。

はて遠く松原つゞくその中を歌うたひつゝ
かへるたのしさ。

棧橋に君と別れて歸り來る電車の窓に匂ふ
春くさ。

ともすれば涙勝ちなるわが性も何故なるか
時に微笑む。

さみしかるそがさゝ一人口笛を吹きすさみ
つゝ山道を行く。

美しく奇しきは雪よ雨となり霰となりて罪
の世呪ふ。

思ひ出し淋しむことのたよりなさ二度と合
へなき夢なるものを。

野に立ちぬわれの若さの去りゆかばこのさびしさも消ゆべきものを。

たゞ一人心もとなく涙する塵の如くも歌へる野邊に。

今日もまた淋しき窓に君思ひ思ひ返して涙ぐみぬる。

月明り若き女がしとやかに物云へるあり艶なる夕べ。

ひろ〳〵と見ゆる水田の畦道を夕日を浴びて馬子ぞ歸る。

いつしかに腦みそめしも君がため物思ひする淋しき五月。

白き顏のれん動けばさしのぞく茶屋の床間の水仙の花。

落葉藉けば淋しや杜に白鳥は消ゆるぞよ、君は病みますらんか。

今日も又友なく一人やゝなれし心に海の遠
鳴りを聞く。

淋しさは苦しみ生みぬ亡き母のありませば
なぜ思ふ敢果なさ。

いづくをば君行きますと振り返る二人の瞳
合ひて又行く。

若き日の一人居淋しカーテンの彼方に泌み
る芍藥の花。

われゆかんあゝわれゆかん地の國に母は半
坐をわけてまつらむ。

孕山のけたき時もわれありぬ船に乘りゆく
君をみたさに。

あてもなく歩みまたりて草にいね海の青み
と親しむ心。

情そは二人がつきぬ涙なれ春は端居に梅日
記しぬ。

野に立ちぬわれの若さの去りゆかばこのさびしさも消ゆべきものを。

たゞ一人心もとなく涙する塵の如くも歌へる野邊に。

今日もまた淋しき窓に君思ひ思ひ返して涙ぐみぬる。

月明り若き女がしとやかに物云へるあり艶なる夕べ。

ひろ〳〵と見ゆる水田の畦道を夕日を浴びて馬子ぞ歸る。

いつしかに腦みそめしも君がため物思ひする淋しき五月。

白き顏のれん動けばさしのぞく茶屋の床間の水仙の花。

落葉藉けば淋しや杜に白鳥は消ゆるぞよ、君は病みますらんか。

火放ては白煙空にうづまきぬあゝ心ゆくよ
春くる空へ。

落葉あさりて火放ては空に溶けてゆくしづ
やかにしづやかに登りゆく煙よ。

風光る春麥畑に揚雲雀高く揚りぬはるきた
るそら。

小女などて思ひはるかに消ゆるぞよ、こゝ海
岸に生命まもらむ。

落日を丘の木立にイずみて春くる空に鳥の
うたきく。

夕ざれば野末に淡くあかあかと野火の煙は
さびしかりけり。

あげひばりたかく揚りぬ空遠く春かぜ光る
青麥畑に。

狹間よりうす紫の霧はるゝ木立の中を行く
あしたかな。

こよわれに海見る丘に小女こよ死せるが如
きこの朝かな。

春のかぜ燕居並ぶ電線の空低きまで光るし
らゆき。

おどろきて夢よりさめしわが心君に向へば
生けるが如し。

心ゆくよ白き煙のうづまけは慕ふ思ひぞ溶
けやう空に。

朝霧の溪より晴るゝ山道の松の並木に光る
春かぜ。

花見るや心佛につかへなむ淺黄にかすむ京
の町かな。

春のかぜ青麥の葉はひるがへり、うす光りつ
ゝくるゝ淋しさ。

山の端の青麥畑に月させばわが足元を春の
かぜ吹く。

君わらず泣きし夕べの松原に海の匂ひと親しむこゝろ。

春の海夕ざりくればたとづれを書かんと思ふなつかしや君。

山里の空の青さにみ入りつゝ白雲となりわが魂かける。

春の水のたり〳〵と砂川の二間に足らぬ橋の下ゆく。

紺青の空のかなたへかへりゆくひばりを過ぎて春のかぜ吹く。

春の雨海のあなたに住む人に降れよと思ふさびしき時は。

春雨の細々けむる裏町の灯ともしころの黄なる灯火。

春のかぜわが足元をやはらかにとほりて過ぎぬ海光るとき。

春の夜や泣きし夕べの傍の石も涙に青くひかれる。

木がくれに夕餉の煙たなびけばたそがれの野に白雲流る。

春のかぜ丘の並木の明るさに光れば海の白き帆を吹く。

春の風わが足元を過ぎゆきし峠の茶屋に光る海みゆ。

春の雨放埒の子は三味投げて撥に枕す山ほとゝぎす。

み出でたるこのひともとの月草に涙落ちにき今宵別れん。

ふと手より逃れて空に流れゆく蜻蛉の羽根に動く初夏の日。

野をゆけば闇の力と魂の力がさそふ夜ぞほたる飛ぶ。

撞き止むな稲田を歩むそよかぜがもたらし
てこし月の夜の鐘。

月の夜の稲田を歩むそよかぜがうす紫の山
の端を過ぐ。

砂山に法螺貝聞こゆ唄聞こゆ灯ともしごろ
を潮走るとき。

いづくよりか早苗を歩む風きたる初夏はよ
しかはたれの杜。

光と影と

うつむきつ磯さまよひし淋しさよいそぎん
ちやくは水を吐きにし。

なつかしき磯の勾ひに引かれゆく心さびし
き八月の晝。

人群を離れて一人砂に坐し海の青みをみ入
る敢果なさ。

草を藉かばやなぞつれなかりけるわが心な
りけむ杜に不歸如帰く。

心せよ更けし靜けき夜の床に胸に手を置き
物をこそ思へ。

病めり病めりされど未練の涙する腦病院に
通ひし夕べ。

初夏の日光あびて物洗ふ女のほとりに咲き
し石竹。

靜かなる夏の月さす戸に倚ればあかず思ひ
は淋しゆうなりぬ。

相思ふ二人が胸は暖たかく君は靜かにはつ
夏へ入る。（安並君に）

つと仰ぐ木の間の光りひるがへる新葉のか
ぼりあれ鳥が啼く。

なにごともかたらず君と別れこし夏のふし
どに物を敢果なむ。

曇り日はかの浴場に人もなく幕など風に漂
ひてあり。（種崎にて詠める）

船作る漁村を照らす白日の痛々しけれ海の
にごれる。

別るればはた合ふことのあるものとこれ思
ひ出の涙となりし。

やるせなく伯父の小家にまろびふし今日も
わびしゆう海見てありぬ。

金ペンはくされり友の消息を愚に待つと思
ひ涙さそはる。

土の香の淡くまつはる濱の邊の松原道を今
日もくだれり。

物云へば森に響きぬ草に坐し明るき木々に
光る葉を見る。

雨上り屋根を照せる白日の光りに今日も瞬
をする。

みすぼれし職工服を着し人の中に君あり若
き日のこと。

ひなびたる我れの姿をあざ笑ふ憎き女と君はなりにき。

暴風雨一夜眠らず物思ふ心にひゞく海のとほなり。

すら〳〵と天氣豫報の白き旗ひるがへりつゝ今日も下れり。

ほの暗き洋燈の光りはつ夏の風が靜かに匂ひ來るかな。

生あらば必す合はん死したらば墓標により て月を仰がん。

岩と岩中に潮の花が散る遠く去りゆく海鳥はよし。

君にとて文書く筆のおのゝきし日など思へり緑り返りぬ。

かにかくに瀟默し琵琶を聽く高野の寺につき出だす鐘。

氷賣る家にかゝりし提灯の古さがまゝに晩
夏なりけり。

月の夜を草より虫は啼き出づる砂丘に坐し
て泣かましゝ。

とく杜に影ほの暗き木々のもと八月の日の
輝きむる。

白衣着し切符をうれる淋しかる女の手にも
夏は泌みけり。

警報は沖に止めし一隻の漁船と浴す客をと
ゞめぬ。

避暑の客なつかし人とあざ笑ひむつれなが
らに今日も濱ゆく。

ゆくりなく濱邊さすらふ人々の中に君見て
嬉れしかりけり。

我が足にまつわる小砂洗ひさる浪を見てあ
り遠雷聞こゆ。

休憩所人去りし後新聞紙廣がりまゝ風に動
ける。
なつかしき浪の音聞ゆ濱の邊の靜けき家に
ひねもすくらす。
渡し場に渡し待つ間のさびしさに物思ひに
きかゝる淋しさ。
吐息せば室に響きぬ青き月やれしすだれに
宿りてありき。

病院の日除けのもとを二人して病人かつぎ
ゆく男あり。
正午時時計を捲きぬニッケルのはげしに出
來し錆の悲しみ。
君思へは青葉の窓にうなだるゝわが若き日
もかくして行くか。
身に泌みる潮の香りなつかしさ今日も引か
れて松原をゆく。

松原の小砂にいぬてさめ〳〵と泣かまほしけれ淋しき心。

囚はれし哀れ淋しきこの心暗黒の方へはこび行かるか。

なつかしき友と別れて默しありせむべき事を君につげしを。

春の灯を思へは秋の灯を思ふこのこゝろをは君につげたし。

並晴小屋靜けき町に立ちてありこの靜寂さを破る槌の音。

捨て難き人をすつてふこの語ふと云ひし時夏の風吹く。

一人兒の心となりて初秋の身に泌むころを啼くかこほろぎ。

すべて世を思ふがまゝにあゆみこし放縱の兒も初秋に入る。

我が胸に包みしものをうぼう如と虫なきな
きて今日も過ぎゆく。

なに心なくてさまよひ今日もまた古城の草
に青き月みる。

星一つ流れてゆきしこの宵を君は露台に人
思ふらむ。（大阪、楓夫人に）

黒髪のほつれをなづる君が手に靑ふ流るゝ
初秋の月。

河岸に立ちて船呼ぶ渡し場の夕燃時のあわ
き印象。

ほとゝぎすものゝ哀れの身をせむるむし暑
き日をあめふりしきる。

毒草の刺戟を受けし神經の不安の念にそゝ
ぐ日光。

白日は照せり今日も絶間なく古き轍より水
分を吸ふ。

日光は隈なく照りて筆山に眠れる友をそゝろ悲しむ。（亡友近藤秋寥兄に）

切符こう男の持ちしステッキの銀に冷たく夏を感ずる。

やるせなく強き光線身に浴びつ廣告により吹きし口笛。

夕ざれは病室の灯とうめき聲こもゞ〳〵われの心さはぎぬ。

やみませし母は語もあらなくに涙流しぬとある日の夕べ。

追懐の心に迫り今は我れ「あゝ母上」となみだ流しぬ。

亡き母の墓標の前にたゝずめば去年植えにし水仙の咲く。

山の端に淋しく立てる石碑の面青白く夏のかぜ吹く。

崩れにしかの山道に崖つける工夫の槌の音
ぞきこへくる。
薄暗く暮れゆく海の淋しさに別莊の人か口
笛をふく。
玻璃窓に倚りそふ君の面みへてダリヤの花
の美くしきかな。
ペプトーンの説明を聞く教室に鉛筆走る音
の淋しさ。

赤き柿ごろりと落ちぬ食卓の上に横ふナイ
フ光れる。
飴をもて猿など作るその邊り小供群れして
見る秋の暮。
別れせし君のひとしほ懐かしや黄昏迫る杜
の木の間に。
君と二人語りしあとゝ思ひ出ぬ淋しき杜の
夕暮の道。

たそがれし窓の邊りの百合の花君に合はん
と見入る敢果なさ。

つと仰ぐ木の間の光りひるがへる新葉見て
ありあれ鳥がなく。

ふと出て丶新緑の杜に靜寂さを親しむ頃を
かへる鳥あり。

我聲に答ふる人もあらなくに星は御空にひ
とり輝く。

靜やかにしのびてゆきし淋しかる戸に倚り
てみる夏の青空。

夏の日は鈍ぶき時計に一刻と刻まれつゝも
我れに向へる。

みあげたるかわたれ時の杜の影わが魂は甦
りこよ。

月の夜は風さや〳〵に惱ましさうつろの胸
にものを願はしむ。

貝殼を拾ひて見れは白日はうす光りつゝ震
ふ六月。

黄ばみたる麥稈帽とわが心靜かに置きて初
秋に入る。

月のもとうす紫に紅にみるみる黒しわが暗
きかげ。

磯千鳥時々よりこわが君のしほざひにねて
足ひたす時。

太陽の匂ひか草をおゝし立つ土塊の嘆き初
夏のいろ。

鐵幹を思ふ日あらは山咲を戀ふる小女と戀
をまたせむ。

天地に聖人はあらむ雲光り罪の世呪ふ雨く
もり日に。

夏來なば青葉を渡るそよ風がわが思ひ出を
そゝる淋しさ。

抱かしめよ君がみ魂をうばひたる緋牡丹の
花朽ち果つる日を。

小女汝はわが行く末を希望もて築かん塔に
石を運べよ。

わが歌は塵の如くも法を越え世の人を越ゆ
と君愛でますや。

夢として空虚の胸に閉ぢしめよ醒めぬ心に
さかづきを取れ。

木の間より早苗を歩むかせきたる君と別れ
しかわたれの杜。

誰が呼びし聲か手先に螢なげわが魂をなぐ
君にあらじか。

木の間より早苗を歩むかせきたる燕の脊に
光る初夏の日。

初夏の早苗を歩む青きかせ燕をすぎて海の
岸すぐ。

初夏を南の海の岸にみる白き燈臺の上かけるとり。

初夏を胸毛ふるわせ小鳥なくこゝかわたれの杜のしづけさ。

草藉けばわが身のそばにむらがれる夏を感じぬ、あれ鳥がなく。

木々はみな緑返りぬみんなみの鳥の小女にいざ歌よまむ。

日の降る方へ

かよわかる羽根に飛び交ふ蜻蛉に涼しさ秋の風は立ちけり。

ふと手より逃れて空に流れゆく蜻蛉の羽根に動く秋の日。

うなだれて砂濱さすらう足跡に淋しさの湧く月の明かるさ。

今宵ふと夜邊夢にみしひとを覺ゆる氣配ひとりもくしぬ。

山茶花の青き蕾に月はよし虫のいきれに汝
れも泣くらし。

行く濠船歸りし濠船にうづ高く積みし荷物
に秋の日の照る。

秋の蟲そはさびしさに堪え難き思ひぞつゞ
く一人の少女。

草の實がはじけて飛びぬ晩秋のたそがれ時
を野に佇すめば。

飛行機ははつたと地上を離れたりプロペラ
響く秋の練兵場。（以下二首荻田氏飛行當日詠める）

飛行機ははつたと離れ地の上にプロペラ響
く秋の練兵場。

ゆく秋は愁多かり山茶花が薄暗がりに咲き
いづる頃。

疲れたる若き女がつゝましゆう秋の野をゆ
く赤き落日。

ゆるみたる時計の打ちしこの二時よ大天地は秋に入りゆく。

別れたる後のさびしさ虫を聞く思ひはいつか悲しゆうなりぬ。

あゝ地下に脊中合はせて横たはる母と妹を思ひさしぐむ。

氷賣る家も少なく古びたる提灯などのかゝる秋かな。

なつかしや秋がさびしく思はせる中に映れる一人の少女。

病める身をいたはりつゝも破(やぶ)れ壁の下(もと)にほろなく虫の音を聽く。

草藉けは我が身のそばに群がれる秋は冷たく物思はする。

脈搏は鈍ぶりて秋はすぎてゆくこのさびしさをなくかこほろぎ。

わきの日は濱に人なく松原の彼方に別莊の
壁の光れる。

さびしさに取り出でし金のペン尖をしみ〴〵
と見るあきはさびしや。

何所かへ行くと問はれて淋しかり厨に啼け
るこほろぎのごと。

一年の後に合はるゝ思ひして指なぞ見ゐて
眠むるあきの夜。

ふと出でゝ歸る心のわりなさにとりし手と
手に淋しさの湧く。

かよわくも朝顔枯れて寶の二つ秋かせうけ
て鳴るがさびしき。

尾を振りつ走り來たりし愛犬の眞白き毛に
も秋仄かなり。

わが頰に冷たき雨はそと落ちぬ雲間〳〵の
星の瞬き。

麥畑の朽ちたる船に身を寄せて君思ふ日の
海の遠鳴り。

秋はさびしや若きこの身に草藉けば冷たき
皮膚に蟋蟀が啼く。

落葉する夕べを杜に佇ずみぬ心明るしあれ
鳥がなく。

稻の穗を刈りて終らず草間の虫いたづらに
啼きやまず居り。

啼き出づる虫は絶え〳〵嘆くかな石の下よ
りわが皮膚冷たし。

赤土のほのかに匂ふ山の端の草に月出で蟲
なき明かす。

やゝなれし心にみゆる砂濱に絶えず淋しく
君見る心。

秋の夜やほろなく虫の哀れさが相思ふ子に
涙ぐませる。

こはろぎは石の下よりたそかれをわが室に
啼くマチ手探ぐれば。

山高く海に向ひて果てしなきみ空ぞつゞく
わが土佐の國。

促織は足をかゞめて飛ばんとす鎌のへさき
に光る秋の日。

亂れ雲山を離れば遠つ國家思ふ子もつるぎ
とるらむ。

虫しぐれわが深省に秋更けぬさやかにくぬ
る白き山々。

こはろぎの父よと秋をなき明かすわが思ふ
こと法の母上。

秋の月さやかにすめはわが心うつすとや云
はん君が心に。

恨まれて死なば心の安すからむ法も空しく
地にゆだねなむ。

杜よなぜてさまよへる身を落葉もて埋れて
土と朽ち果てしめむ。

君思ふ心なやめるそのはてを切崖しにゆく
おそろしきゆめ。

大いなる雷となり峰寺の杉の梢にわけ入り
しかみ。

鉄柵の冷たき秋のあけ方の共同墓地の黒き
わがゝげ。

思ふこと數ならぬ身となりにけり林を歩む
初秋の風。

手に取らはさやかにくぬる山々の峯を離れ
し夕月の色。

杜よさらばわが思ふことおぼかたにあかし
なりけり君思ふ身は。

花みるや心佛につかへなん淺黄にくるる京
の町かな。

わか歩む地上の影と大木とさやかに搖るゝ
初秋のあさ。

あきの日は甲板にみる大錨さびしがまゝに
港出でゆく。

あほき海、むらさきの海、くろき海、南に向ふわ
が土佐の國。

山並は遙かに月をむかへたり木の間に秋と
わびしむ心。

網干せる埠頭の秋のものしづかさやかに音
し潮みちひする。

黄ばみたる麥はら帽とわが心しづかに置き
て初秋に入る。

緑葉よ汝がもとにぬるわが姿何をか夢む秋
のひとゝき。

白き手か秘かに出づる露臺(バルコン)にその白き手が
物思ひする。

眼閉ぢなば椽の明りにやつれたる黒髪ながき横姿みゆ。

あきは來ぬ古き宮井の大銀杏そがもとに立ち物願ふ人。

わが歩むかたへの山の夕間暮釣鐘草に夕日はあかし。

戸あくれはまづ上目しぬ秋空は家並に消ゆ蜘蛛の巣淋しや。

美し夢二度と合へなく見殘しゝ秋のあしたは萩に露置く。

なぜてわれ無言の石に眼閉ぢ大いなる空にわが姿描く。

芦の間を縫ひ行く船の灯はかすかにゆれて星影白し。

あきのかぜ根上り松の下に立つ茶屋を下る白き砂道。

あき晴れやかたんことんと土を堀る浚渫船
に飜る旗。

胸に手を置きて物なぞ思ふかな、あはれぞ君
の才はたけしか。（亡友武田熊夫兄に）

野の姿、杜の姿、君の姿、わが前にみへなみだ
新らし。（亡友澤村白渚兄を悲しみて）

落葉しきて浪の音聞かは友思ふ心に海の傷
ましきかな。（亡友片山紫山兄を悲しみて）

友とししてまことやさしき君なりきとり殘
されてわがしぬびごと。

いちはやく萱の穂動く初あきの白き道行く
巡禮の群。

月澄り君を待つ間の徑ぬれはにや海棠の花
青く黒ずむ。

わが魂をかりてぞ空に白鳥は消ゆるぞよ杜
に落葉を藉けば。

落葉藉きて秋を詫しく思ふかな鐘の音遠く
こだまする寺。

藤かすちさやかに影を地に映す秋に向へる
わびしき心。

淋しかる杜の彼方に日光を浴びて光れる君
が家かな。

杜行けは落葉の香りわがにぶる神徑さしぬ
淋しき夕べ。

あきの日を丘の木立に物思ひ太平洋の船を
ながむる。

なつかしや君あるためにさびしかる秋の野
に立ち歌をうたひぬ。

亞鉛屋根の雨音聞きつ藥劑師藥もる間を默
す秋の日。

死期近き母ののたまひ忘れ得ぬ十才の秋は
七年すぎぬ。

しみ〴〵と鐵打つ音は初あきの輕き空氣に
響き渡りぬ。

雲よ雲幾山越ゑて君が住む水の都のはつ秋
にふれ。

はかざりし鞭に生せじかびの香を初あきの
朝かぐがさびしさ。

休晴中久しく置きし筆入の亞鉛に匂ふ銷の
かなしみ。

淋しさに泣く日

冬空はうすら冷たしかゝる夜は虫の音もな
く心やすけし。

たそがれをときれ〳〵に雲の飛ぶそれの如
くも淋し初冬。

悲しさの湧くらむ如く雲の飛ぶはつ冬の野
に一人たゝずむ。

わが若き腦みの絶ゆるひまぞなし秋ゆき冬
はきたれりされど。

いともろく玉の如くもまろび落つ涙に冬の
冷たさを知る。

冬の日は冷たし君は病みますとあゝ空のい
ろわだつみもまた。

かゝる夜は冷たし君は風めすとしづ心なし
あゝ遠人よ。

落葉する夕べを脊戸にもたれつゝ空行く雲
に心流るゝ。

つと默し眼閉ぢてあれば逝きし母さゝやく
如しかなしみの湧く。

初冬を小宮林にたゞずみて鳥の鳴く音をな
つかしむかな。

つと出でゝ背戸に倚りそひ空仰ぎ雲を見て
ありしづけき心。

雲よ雲何地で消へん雨となるとぎれ〳〵に
流れゆく雲。

わゝ刹那別れし午后の後姿見るごともなく
冬はくれゆく。

天地は静かなるかなこゝろよき心にいつか
初冬が泌む。

冷たかるこのたそがれを戸に倚れば月の光
りに冬群がれり。

冷たさにふるへて立てる魂の海吹く風にふ
るうさびしさ。

手を胸に置きて一日の事をなぞさびしく思
ふ夜のつゞく冬。

梅が香よ千桁の數文を急く小女よ淋し兄と
こそ呼べ。

黒髪のよきは小女にねたまるゝさゝいな事
に涙するひと。

わが車君があとをす坂なれや如月のもとう
つりゆくさが。

わがために淋しき影の小白合たをらむとし
てためらひし谷。

わが嘆きものゝすべてを葬らむ苔の花咲く
石碑のもと。

その瞳をとぢてほつれし黒髪をなであげつ
ゝもわれを守りぬ。

戀はしも敢果なきものゝ常ならは君も心を
ゆるし給はむ。

われを知るその人の爲め朽ちしめよ花にも
命ありけるものを。

恨まれてかろきねたみにその黒髪かわかと
こしへのかくれ家となりぬ。

一筋の冬枯れの道を只一人塵の如くも歌ふ
子は誰。

風になびく萱の穂はよし馬子歸る冬枯れの
野の赤き落日。

泣きに來しかの冬枯れの野の草の匂ひか哀れさびしかりけり。

冬枯れの野路に佇ずみ物思ひ眼閉ぢ眼開らき君を思へり。

それもまた運命なりにき知らざりきこのあぢきなき涙よなみだ。

棧橋は悲しき所よ送別の人の涙のにじめるを見よ。

初秋の町を歩めり秋風は店の野簾をさびしげに吹く。

巣を作る蜘蛛の心となにしらずかゝる虫とを思ふ秋の日。

旅の子か林の中にゆきて吹く口笛あはし秋の凋落。

そことなく蟲のほそ〳〵なける夜を戸に倚りて立ち涙ぐむかな。

流れゆく白雲いつか消へ失せし秋は淋しや
野に立ちあれは。
まろびねて歸る心もあらなくに秋の林に海
を眺むる。
生なくは悲しきこともなきものと思へは淋
しさびしきあきか。
我か室に灯ともす頃のうれしさよマチの光
りに秋と親しむ。

親しまる秋の來りて靜かなる人の心と香の
なつかしき。
あきの雨海のあなたに住む人に降れよと思
ふさびしき時は。
晩秋の暮色を眺む女ありカーテン白しあき
のたゞやふ。
オレンヂかそれともわかぬ雲の飛ぶあきの
野末に一人たゞずむ。

ペン軸をかみつふるへしこの指に初冬の氣
のしみるつめたさ。

ふと合ひし友に聞きたるかの事を忘られず
して默しつ歸る。

秋は來て庭の梧桐の散りそめぬわがさびし
さのそれの如くに

馬子一人落葉林と常盤木の中を彼方にうた
ひてゆく。

なつかしき臥床にゐねて物思ふこの靜けさ
をなき出づる虫。

晩秋のたそがれ時を川にゆきわか淋しさを
うつすあはれさ。

秋の日は大川筋の監獄の屏を照らして川の
濁ごれる。

何心なくてペンもて虫をなぞつきて燒く日
のつゞくこの頃。

虫の音の絶え行く如き心して月下の窓に尺八を聞く。

鐘なるを梧桐の窓に數へにき君すむ里に夕月は照る。

君住まう宮のほとりの大銀杏黄いろき色して木枯を待つ。

涙せる君の瞳のひとしほに悲しみ覺ゆはつ秋の朝。

うつり香をあかず親しみ別れにしひとを思へりなき出づる蟲。

ゆくりなく合ひし瞳の淋しかりこのまゝ秋もすぎて行くらむ。

帆をまけはひるかへりつゝ日の丸の旗も下れり秋晴れの日や。

そと行きしわか足音に驚ろきて絶えし虫の音月のあかるさ。

秋を呼ぶ月夜になけるこほろぎを聞かんと
よりし月の明るさ。

夕ざれは虫の音絶へしその刹那やれし我か
身に淋しさか湧く。

いともろくやせしわか頰をまろび落つ涙か
誘ふうら若き魂。

さびしさのいつしか迫り梧桐落つ秋の音悲
しおとづれ書かん。

しづかなる秋の月さす戸に倚ればあかず思
ひは淋しゆうなりぬ。

晩秋を小宮林にたゝずみて鳥のなく音をな
つかしむかな。

疲れたる若き女がつゝましゆう秋の野をゆ
く赤き落日。

木の葉散る秋の姿の哀れさをふと思い出づ
君と別れて。

秋はきぬ松の並木の蔭影の長く線引く海の
岸より。

鵜飼する船の灯火芦の間を縫ひつゝゆけば
星白うふる。

一人兒の心となりて初秋の身に泌む頃をな
くかこほろぎ。

秋の來て蟋蟀なきぬ十三路すぎし人をば母
と思ひなすころ。

初秋の野分の中にものしたるわがうたをも
て酒にかへなむ。

君去りしあとに殘りし三味線の弛みし糸に
さびしさの這ふ。

應接室見越の松の淺緑わが思ふことわすら
れなくに。

もの乞へば七つの鐘を三つまでは數へたり
にしわれなりしかな。

秋の日を丘の木立に物思ひ太平洋の海をみつむる。

別れにし君の面影見へずただ日々につのるは追憶の日よ。

夏の日は鈍ぶき時計に一刻と刻まれつゝも我れに向へる。

網干せる埠頭の秋のものしづかさやかに音し潮みちひする。

桐の葉の面をすべる雫みてかなしと思ふ我れとなりにき。

病室のカーテンに血の泌みしごとダリヤ咲きけりいやさびしけれ。

淋しかる杜の彼方に日光を浴びて光れる君が家かな。

心安し二月の空の色いかに君の瞳になつかしからむ。

やるせなく人の家貸りて障子はるこのさび
しさを思ひつゝくる。

百合の花中に夢みる幸多き君こそ見ゆれこ
の旅人に。

船作る漁村を照らす白日の痛々しけれ海の
濁れる。

なげやりしわが魂に風戰ぐ春まだ淺き海の
ほとりに。

君あらず泣きし夕べの傍の石も涙に青く光
かれる。

なぜてわが思ひ半ばにかたはみはゝドけて
飛ぶやこの小さき實が。

こよわれにやさしの小女こよわれに甲斐な
き思ひ抱けるわれに。

昨の夜の夢より醒めしわが心君に向へは生
けるが如し。

宇宙に存在する吾が心の中には、生れながらに一種特別の光明を認むる能力が具はつてゐる。其のものが何等の經驗にも關係なく直接に爲さざるべからざることを我々に示す、云はゞ神から授けられたとも見るべき良心が我々の心の中に備つてゐる。これを表はしてみる能力を世の青年諸氏に示したく思つた。

「微笑」「おもひで」「秋海棠」の短歌原稿から拔いた。明治四十年以後大正四年五月迄の作。私はなるべくこの書を學生諸氏の御一讀給はらんことを希望する。私が中學校五年間の作と以後の作があるので。

著者

新聞代一ヶ月廿七錢、三ヶ月前金七十八錢、六ヶ月一圓五十三錢
郵税一ヶ月十錢

廣告料　五號文字一行十六字詰二十錢、三號三十錢、二號四十錢
一號六十錢、初號八十錢、特別欄五割增、挿入倍增

創立明治十年
發行所　高知市本町三百五十番地

文をもて劍にかへむ
若き子に光もてこよ
すみやかに來よ
修養は書にあり
書籍は書店にあり
書籍雜誌
迅速に發送す
高知市本町筋一丁目南側五三
小川書林
短歌會 同書林方 花葉短歌會

278
420

（不許復製）

大正四年九月廿日印刷
大正四年十月十日發行

郵稅共拾五錢

著者 溝淵繁

編輯兼發行者 高知市本町筋九十三番屋敷 矢野千三

印刷人 高知市水通町一八三 野町傳次

印刷所 高知市水通町一七五 野町印刷部

發行所 高知市本町筋一丁目小川書林内 花葉短歌會

發賣元 高知市本町筋一丁目南側五三 小川書林

發賣元 高知市種崎町 片桐開成社

胸に手を置きてさびしく物思ふ
わりなきこゝのつゞく秋かな。

終